

異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



昭和59（1984）年5月、佐野学園は異文化コミュニケーション研究所を設立しました。平成12（2000）年まで同研究所の副所長を務めた久米昭元先生は、古田暁所長とともに学外の研究者にも門戸を開きながら、異文化コミュニケーション教育を日本で広めていく活動を展開していきました。久米先生に異文化コミュニケーション研究所での活動の日々とその意義についてお聞きしました。

私は昭和19（1944）年に神戸で生まれ、高校を卒業するまでを大阪で過ごしました。外国と縁のある家庭に育ったわけではありませんでしたが、数学は苦手、英語の成績がよかったので神戸市外国語大学の英米学科に進学しました。

大学3年生のときに、「日米学生会議」が開かれることになりました。昭和39（1964）年です。日本から77名の大学生が派遣されることになり、私もそのひとりに選ばれました。学生が海外に行くなんて考えもしなかった時代に、2週間にわたり、オレゴン州ポートランドの近くのリードカレッジでの会議に参加しました。会議では、アメリカ人があまりにもよくしゃべるのに驚きましたね。

会議が終わると、私はアメリカに残って旅をすることに決めました。99ドルで全米を回れるグレイハウンドバスを使って、サンフランシスコからシカゴ、ソルトレイクシティ、ニューヨーク、そして南部を巡りました。宿にはできるだけ泊まらないようにして、ほとんど夜行バスで寝ました。今思うと、少しは冒険心があったのかもしれませんがね。



昭和41（1966）年4月、大学を卒業した私はドイツ系の製薬会社である日独薬品に就職しました。後の日本シエーリングです。英文でレターを書いて、ドイツ本社とやり取りをしながら、薬を輸入する仕事です。2年ほどすると、ずいぶん仕事を任せられ、先輩には「10年後には課長になれるぞ」と言われましたが、「このまま地味な仕事を続けても面白くないなあ」と思うようになっていました。そんなとき、新聞で「同時通訳研究会」の小さな記事を見つけたのです。

同時通訳研究会は大阪の梅田にありました。室内に入ると、研究生がヘッドフォンを着けて、マイクに向かって話している。何か面白そうでした。そこで週2回、会社帰りに研究会へ通い、同時通訳になる訓練を受け始めました。数カ月すると、化粧品国際会議で同時通訳を務めることになりました。担当はオープニングの基調講演です。事前に原稿をもらえるから心配ないというので引き受けました。でも、本番では講演の後に質疑応答があって、それは原稿なしの同時通訳。冷や汗ものでしたね。(1/9)

異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### “Intercultural Communication” 求めていた学問に出会ったと直感した

当時は昭和39（1964）年の東京オリンピックが終わって、昭和45（1970）年の大阪万博を控えていた時期でした。大阪でもずいぶん国際会議が開かれるようになり、同時通訳のニーズも増えていました。昭和44（1969）年、同時通訳研究会を主宰していた会社、インター大阪に転職をしました。

世界各国の人々が参加する国際会議では、同時通訳がいることでコミュニケーションが成立します。張りつめた緊迫感のなかで、言葉を置き換えながら、コミュニケーションの橋渡しをする。やりがいがありましたね。会議の前には専門知識を猛烈に勉強します。私はものすごく不器用。だからこそ一生懸命やる。うまくいったときは、本当にうれしかったですね。

国際会議では、日本人がいつも外国人に議論で押されていたのを見てきました。日本人はなぜうまく発言できないのか？ 外国人相手にもっと自分の意見を伝えるにはどうしたらよいのか？ そんなことを思うようになっていました。一方で、自分自身の力不足も感じていた。やっぱり留学しなくてはと強く思うようになっていたのです。そして、6年間勤めたインター大阪を辞めて、ハワイ大学の大学院に留学しました。昭和49（1974）年のことです。



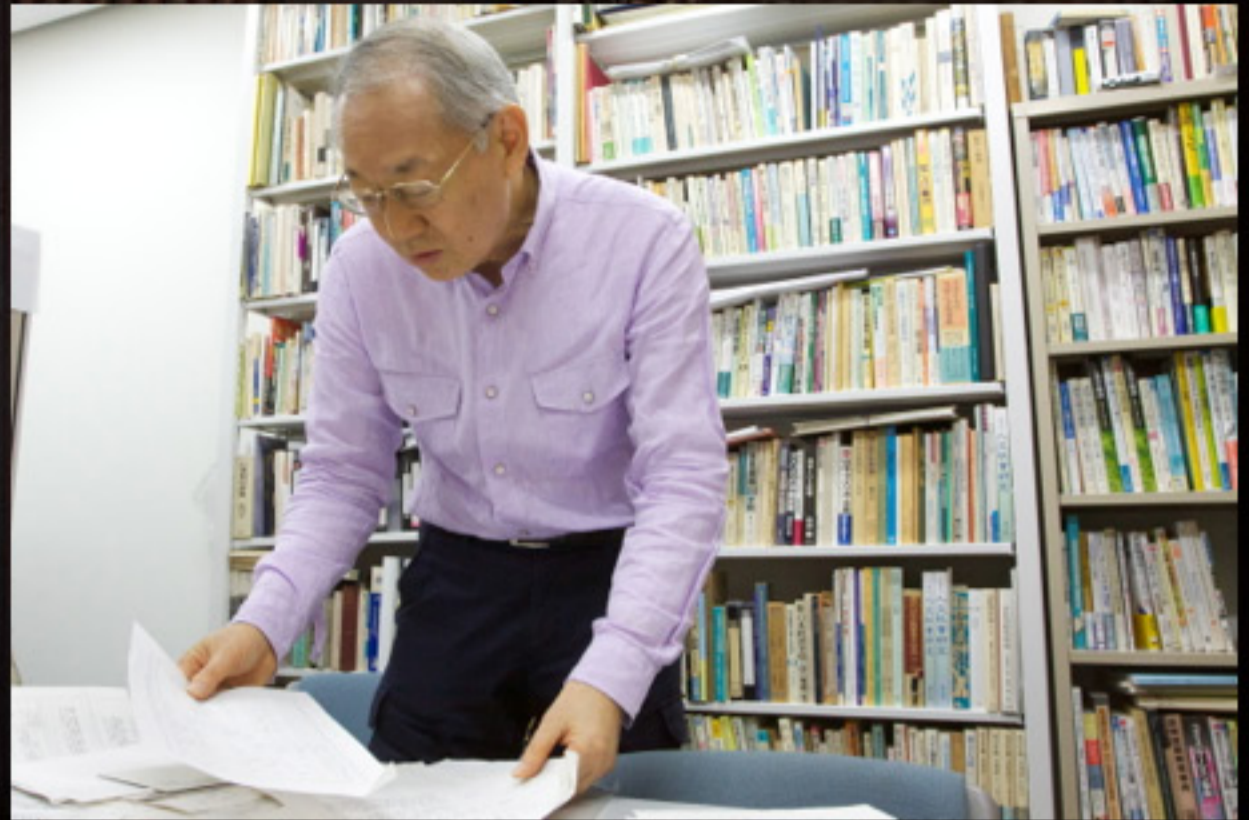


ハワイ大学への留学はイースト・ウエスト・センターの奨学金によるものです。センターはアメリカ政府がホノルルに設立した機関で、アメリカとアジア太平洋地域の相互理解を目的とした研究活動と留学プログラムを行っていました。ここの奨学金で、数多くの国々の学生がハワイ大学に留学していたのです。生活する宿舎はセンターの寮です。共同のキッチンがあって、留学生たちはそれぞれの国の料理を作り、交流をする。さまざまな文化に触れる貴重な機会でした。

大学院ではアメリカ研究を専攻しました。コミュニケーションにも興味があったので、スピーチ学部を見学してみると准教授に西山和夫先生がいらっしゃった。日米間のビジネスコミュニケーション研究の先駆者です。私は西山先生に、同時通訳時代に抱いた日本人と外国人のコミュニケーションについての問題を投げかけてみました。西山先生は、「それなら "Intercultural Communication" を学ぶといい」と助言してくださいました。異文化コミュニケーションです。私は直感的に自分が求めていた学問に出会ったと思いましたね。(2/9)

異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### 異文化を理解し、コミュニケーションを実践で学ぶ 衝撃を受けたミネソタ大学の博士課程に進学

西山先生はミネソタ大学のウィリアム・ハウエル教授の指導のもとで博士号を取得されておりました。そこで、ミネソタ大学でのハウエル先生の講義について調べてみたのです。私はハワイ以外での研究調査にも費用を負担してくれるイースト・ウエスト・センターの制度を利用して、昭和50（1975）年の夏学期の集中講義をミネソタ大学で学ぶことにしました。

アメリカの大学でも異文化コミュニケーションの授業がほとんど行われていなかった時代です。ハウエル先生はスピーチ・コミュニケーション研究科のなかでこの領域の専攻を立ち上げ、関連する科目も数多く設けられておりました。異文化コミュニケーションの講義では、クラスがアメリカ人の学生20人と留学生20人で構成されておりました。実際の対話を通じて、異文化を理解し、コミュニケーションを体験として学ぶ授業でした。教室がまるで実験室。非常に画期的で衝撃を受けましたね。私もハウエル先生のもとで学びたいと思い、ミネソタ大学の博士課程に申し込まれました。昭和51（1976）年1月、常夏のハワイから真冬のミネアポリスへと飛び、異文化コミュニケーションを専攻し始めたのです。

ミネソタ大学では、大学内で留学生の財政的な相談に対応する仕事をいただきました。その日の食事にも困っている留学生から依頼を受けてインタビューを行い、学費や生活費のローンを検討する。1週間に20時間ぐらいいんたびゅーに費やしました。ただ、困窮を訴えてローンを受けた後に、街で高級車を乗り回している留学生もいて、そんなときは、「やられた！」と悔しい思いをしましたね。



博士論文のタイトルは、『アメリカにおける意思決定に対する日本的アプローチの探査的研究』です。1970年代後半の当時、アメリカには日本企業が進出し始めていました。日本企業では事業の決定をする際に関係部署や上司の了承を取りながら、合意形成をしていきます。一方のアメリカ企業では、リーダーが自らの権限のもとに意思決定をし、そのうえで同僚や上司を説得していきます。

両者の違いは明確でしたから、私は日本企業で働いているアメリカ人が日本的なアプローチにどのように対応しているかを調査したのです。全米から5社の日本企業を選んで訪問して、数十人のアメリカ人マネージャーたちにインタビューをしました。(3/9)

異文化理解教育の先駆者たち

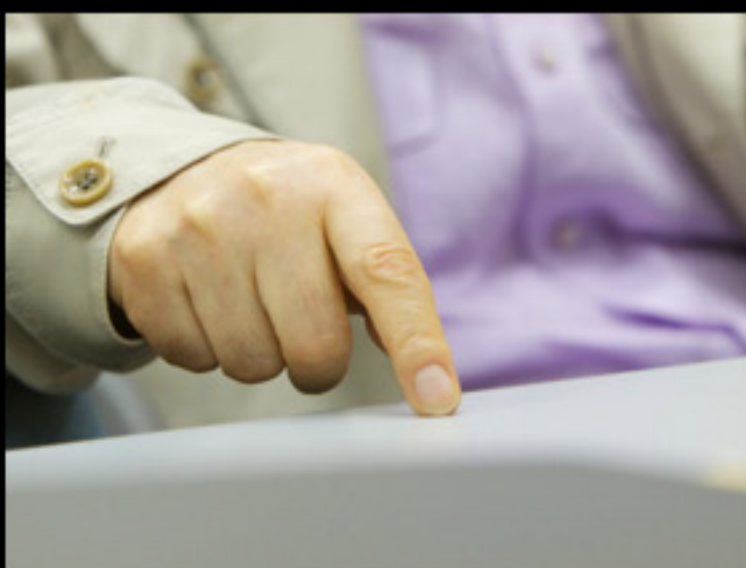
第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### 現実社会で起きている事例を提示し、異文化コミュニケーションへの学生の関心を高める

日本企業で働いているアメリカ人たちは、日本的な経営を評価していたし、対応しようと努力していました。しかし、深層心理では矛盾を感じていたのです。まさに文化の違いです。マネジャーという権限を与えられているのに、「全体を考えてほしい」と言われて、自分の決定を覆される。リーダーが不在でも、みんなで話し合って方向性を決めようとする。満場一致で合意するのを目指すから終業時刻を過ぎても会議が延々と続く。アメリカ人はプライベートを大切にするので、「これでは妻に離婚されてしまう」と嘆いていたマネジャーもいました。ビジネスの現場、とりわけ意思決定の場面では、文化の違いによるコミュニケーションの衝突が現れることを具体的に知ることができたのです。

こういったアメリカの事例調査は、その後に神田外語大学で異文化コミュニケーションを教えたときにも非常に役立ちました。講義では具体的な事例としてアメリカに進出した日本企業で起きていることを話しました。学生は学術的な理論よりも、現実社会で何が起きているかを知りたいがりますからね。外国語を学び、外国と関連する仕事に就きたいと考えている学生も多かったので、ケーススタディーには関心を持ってくれたと思います。私は実際に世の中で起きていることを調べることに力を入れるタイプの研究者だったので、そういった具体的な事例を学生に伝えられたことには意義があったと思いますね。





神田外語大学の異文化コミュニケーション研究所では広い視野で異文化コミュニケーションを捉えていました。この領域を日本の大学の教育科目として定着させるだけでなく、実際の社会でどのような現象が起きているかを広く伝えることが重要だと考えていたのです。ですから、研究所が主催する講演会でも、私たちの社会で大きな意味を持つビジネス分野の方々にも数多く登場していただきました。私も、同時通訳時代に出会った、住友化学工業の岡野光弥氏をはじめ多くの方々に講演を依頼し、国際ビジネスの現場で起きている異文化コミュニケーションの問題について語っていただきました。

話を1970年代に戻しましょう。昭和54（1979）年、私は日本に帰国しました。4月から名古屋にある南山大学の外国語学部で専任講師として教え始めました。後に神田外語大学の異文化コミュニケーション研究所を立ち上げ、所長を務められた古田暁先生に出会ったのはその時期のことでした。（4/9）



異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



**異文化コミュニケーションの研究所を持ち、研究活動を思い切りできるのは神田外語大学しかなかった**

昭和55（1980）年、エドワード・スチュワート先生が国際基督教大学で客員教授をされていました。スチュワート先生はミネソタ大学時代の私の恩師です。先生は日本が直面する問題を議論する会合を主宰されていました。当時は日米貿易摩擦が激しくなり始めていた時期。経済的な力を増す日本と他国との間でさまざまな問題が生じるようになっていました。私は、この会合で古田暁先生に出会ったのです。

古田先生にはオーラがあり、人を引きつける力がありました。確固たる信念があり、物事を哲学的に、そして明快に語る。長年、アメリカやパチカンで神学の研究をされてきた古田先生もまた、日本の現状に危機感を覚えていた。非常勤講師をされていた国際基督教大学でスチュワート先生に出会い、異文化コミュニケーション教育が、その問題を解決するために必要であるとお感じになっていました。とりわけ、日本の若者の考え方を柔軟にするためにね。

その後、古田先生は佐野学園と出会い、異文化コミュニケーション研究所（以下、異文研）の設立に参画されました。この分野では日本初の研究機関です。昭和59（1984）年に活動を開始した異文研は、神田外語学院の講堂で講演会シリーズを始め、そうそうたる論客が異文化理解の課題について講演をしました。



私自身は、昭和58（1983）年に神戸市外国語大学の助教授に就任していました。その後、千葉の幕張での神田外語大学の開学が決まり、東京の神田にあった異文研も大学のキャンパス内に移転することになりました。古田先生には、ずいぶんと神田外語大学に誘っていただきました。しかし、関西の人間にとって、箱根の山を越えて関東に拠点を移すのは勇気がいるものです。昭和62（1987）年の神田外語大学の開学からの数年間は、異文化コミュニケーション科目の集中講義の講師として、短期間の授業を担当しました。

当時、異文化コミュニケーションの研究所を持ち、研究活動を思い切りできるのは神田外語大学しかありませんでした。私にとって非常に魅力的な場所だったのです。古田先生に、「ここであなたのやりたいことを、思い切りやってください」と言っていただき決心がつけました。平成2（1990）年、私は神田外語大学の教授に、そして翌年には異文研の副所長に就任しました。（5/9）

異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### アメリカの大学で設けられている コミュニケーション論の科目を次々と設置していった

古田先生は、異文研の研究所を「情報センター」と位置づけました。異文化コミュニケーションに関連する書籍をそろえ、蔵書は最大で5000冊に及び、独自の6進法で整理しました。他大学の研究者も閲覧に来ていましたね。異文化コミュニケーションに関する学外からの問い合わせにも積極的に対応しました。



異文研の活動には「教育」「研究」「啓蒙」の3つの柱がありました。まず、「教育」ですが、神田外語大学のカリキュラムでは、専門教育科目として、日本という自分たちの国の文化や価値観の成り立ちを理解する「日本研究」、異国のさまざまな文化背景を学ぶ「国際理解」、そして日本と外国との間をつなぐ「コミュニケーション」の3領域が設けられていました。全学科共通の選択必修科目です。共通科目で文化理解とコミュニケーションを学んだうえで、それぞれの語学の専門性を高めていく仕組みになっていたのです。異文化コミュニケーション研究所のほかに設けられていたのが「日本研究所」と「言語教育研究所」です。教員が研究を続ける環境が整えられ、日本文化や外国語教育の面でも教育内容を充実させる取り組みが行われていたのです。



コミュニケーションの領域では、開学の年に「コミュニケーション論」が設けられ、翌年に「異文化間コミュニケーション論」が開講しました。年を重ねていくごとに新しい科目が必要になり、私は教授会でコミュニケーション科目を増やすことを提案しました。「組織内コミュニケーション論」「メディア・コミュニケーション論」「国際ビジネス・コミュニケーション論」など、アメリカの大学で設けられている科目を次々と設置していきました。「非言語コミュニケーション論」も設けましたが、この科目が日本の大学で設けられたのは神田外語大学が初めてだったと思います。当時、あれほどコミュニケーション科目が充実していた大学は他にはありませんでしたね。

異文研では講義用にビデオも制作しました。例えば、留学生用の学生寮を期限が来て退去しなければならない中国人学生がいる。学生課で日本人寮に入居したいと訴えるが、職員は頑として受け付けない、という内容です。ビデオを見た学生たちからは、「留学生の主張が強すぎる」「職員は留学生の話をもっと聞くべきだ」といった意見が活発に出ます。こういった議論が異文化コミュニケーションのセンスを磨くには非常に大切なのです。(6/9)

異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### 研究活動のために学外の研究者も支援 幕張での研究は今も受け継がれている

異文研では、「研究」にも力を入れていきました。「日本の大学におけるコミュニケーション教育に関する調査」「青年海外協力隊調査研究」「帰国子女の日本社会への適応研究」など、さまざまなテーマが設けられました。活動を続けるうえで大きかったのは研究所の予算です。学部から独立した機関として、独自の予算を組んでもらっていたので、遠方の研究者が幕張に来る交通費を支給し、大学の宿泊施設も利用できました。当時は、みんな手弁当でも共同研究をしようと燃えていたから、そのサポートは大きな後押しになりましたね。



研究会のひとつが「異文化コミュニケーションキーワードの体系化に関する研究会」です。2年間にわたって、7人の研究者が集まり、20回以上の研究会を実施しました。約1400に及ぶ異文化コミュニケーションに関するキーワードを集め、整理し、体系化していきました。その成果は、平成8（1996）年に報告書としてまとめるとともに、平成9（1997）年に出版された『異文化コミュニケーション・ハンドブック 基礎知識から応用・実践まで』（有斐閣）にも反映されました。こうして、研究活動から出版という「啓蒙」へも広がっていったのです。



話は前後しますが、神田外語大学が開学した昭和62（1987）年に、『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』（有斐閣）が出版されました。古田先生が監修し、石井敏先生、岡部朗一先生、そして私が執筆した共著書です。異文化コミュニケーションの理論を体系立ててまとめた本であり、この分野では日本で初めてのテキストブックと言ってよいでしょう。この本は、多くの大学で使われるようになりました。経済や法学の事典を出版する有斐閣が異文化コミュニケーションという新しい学問を取り上げたことも画期的でした。その後、同社からはこの分野の専門書が数多く出版されました。

平成25（2013）年、『異文化コミュニケーション事典』が出版されました。石井先生と私が編集代表を務め、総勢155人の研究者が参加した、異文化コミュニケーションに関する総合事典です。このような事典はアメリカでも前例がありません。この事典の元になったのが、先ほど述べた異文研でのキーワードに関する研究プロジェクトです。1990年代に幕張の神田外語大学に数多くの研究者が集い、熱い議論を交わした異文研の活動内容は今もきちんと受け継がれているのです。（7/9）

異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### 2泊3日の宿泊型研修で 参加者の交流を図った夏期セミナー

異文研では、啓蒙活動として、ニュースレターや紀要『異文化コミュニケーション研究』の発行に加えて「異文研夏期セミナー」を開催していました。

私がまだ、神戸市外国語大学で教えていた昭和61（1986）年の夏、スタンフォード大学で行われた異文化コミュニケーションに関するセミナーに参加しました。SIIC（Stanford Institute for Intercultural Communication）です。異文化コミュニケーション分野のビジネスコンサルタントとして活躍されているクリフォード・クラーク氏が立ち上げたセミナーです。

このセミナーの参加者は研修だけでなく、プライベートな時間も共有しました。食事をともにして、余暇も一緒に楽しむ。研修もさることながら、そういった時間が文化背景の異なる者同士の人間理解には役立つのだと実感しました。

神田外語大学が開学し、異文研の活動が盛んになっていったころ、異文化コミュニケーション論をカリキュラムに加える大学が少しずつ増え始めていきました。ある学会に出席された古田先生は、他大学の教員たちが異文化コミュニケーションの授業をうまくできていないことを実感され、「それならば神田外語が研修をやりましょう」と宣言されました。





古田先生から研修会の実施を相談された私は、真っ先にスタンフォード大学でのセミナーを思い出し、泊まりがけで交流を深められるようなものにしようと考えました。こうして2泊3日の「異文研夏期セミナー」が平成3（1991）年にスタートしたのです。セミナーでは、神田外語大学で異文化コミュニケーション科目を担当していた教員が中心となって、授業内容を参加者に開示していきました。こういった内容のセミナーも当時ではありえなかったですね。

平成7（1995）年からは福島にあるブリティッシュヒルズに会場を移しました。研修の空き時間にはテニスやビリヤードで交流を深めました。全国から参加者が集まり、人数も最初は25人ほどでしたが最大で70人ぐらいにまで増えていきました。夏期セミナーの参加者が中心となって、新たに「多文化関係学会」が平成7（1995）年に誕生しました。初代会長には、神田外語大学の学長を務められていた石井米雄先生に就任していただきました。(8/9)



異文化理解教育の先駆者たち

第3回 久米昭元 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所元副所長  
かつてない活動を展開し続けた異文研



### 違いを認識し、受け入れられれば、 不要な争い事は回避できる

異文研副所長としての仕事は、とても忙しかった。日々の講義を抱えながらの業務で、事務的な仕事も多い。普通の教員はやりたがらないでしょう。それでも11年間にわたって任務を続けられたのは、とにかく面白かったからです。

当時の異文研はまるでNPOのような団体でした。まずは意義ありきで、いろんな研究者が集まり、みんなで研究の企画を出し合う。予算をきちんと組んでもらったし、研究員や事務員のスタッフもがんばってくれた。そして何よりも古田先生が私を自由に泳がせてくれた。古田先生は、研究所のシンボルとして大きな方向性を決め、アイデアも出してくれますが、細かいことは一切言わずに任せてくれました。古田先生と私はとても相性がよかったと思いますよ。

世界では今も各地で紛争が続いています。20世紀にあれだけ戦争を起こしてきたのに今も争いは終わらない。本来は人間の幸福を追求するはずの宗教もまた争いの原因になっています。専門家のなかには、「グローバル化の時代に、文化の違いをどうこう言うのはもう古い」と言う方もいます。でも、私は世の中の多くの事象は異文化コミュニケーションの視点で十分に語れると思います。



この分野をもっと発展させるには明確な目標設定が必要です。私は異文化コミュニケーションという学問は、平和学だと信じています。日本人と外国人だけでなく、日本人同士であっても文化背景の違いはある。でも、互いの違いをきちんと認識し、違いを受け入れられれば、不要な争い事は回避できるのです。

神田外語大学のある幕張新都心は世界に開かれた国際都市です。幕張というコミュニティで神田外語大学の力を存分に発揮する。そして一方で国という枠組みを超えて、世界へと向かっていく。そんな大学であり続けてほしいですね。

#### 久米昭元（くめてるゆき）

昭和19（1944）年生まれ。神戸市外国語大学を卒業後、製薬会社や同時通訳会社を経て、ハワイ大学大学院に留学。昭和54（1979）年、ミネソタ大学にて博士号を取得。南山大学、神戸市外国語大学で教鞭を執った後、平成2（1990）年から平成12（2000）年まで神田外語大学教授、および異文化コミュニケーション研究所副所長を務めた。その後、立教大学異文化コミュニケーション学部にて、教授、特任教授を歴任し2014年3月に定年退職。現在は北海道で第二の人生を謳歌している。(9/9)